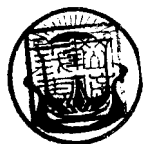


岡崎義恵著作集 10

近代日本の詩歌

宝文館刊行

近代日本の詩歌



定価 1500 円

昭和三十七年八月五日 第一刷発行

著者 岡崎 義 恵

発行者 宝文館出版株式会社

(代) 伊崎 治 三 郎

印刷者 根本 力 三

東京都新宿区東大久保二ノ七八

発行所 宝文館出版株式会社

東京都千代田区神田神保町三ノ一七

振替東京二八〇番

印刷・中教印刷
製本・大光堂製本

序

明治以後の詩歌に関する評論・随感の類を一括して、本書に収録したのであるが、巻末の目録にもある通り、多くは雑誌などの出題に応じて執筆したものであるから、体系のあるものではない。ただ余りに重要な題目であるにかかわらず、本書に欠けては不本意であると思われるものを、新たに起草した。「藤村と有明」「白秋の短歌」の二篇である。これも草卒の際執筆したものであるから、精密な研究というほどのものではない。私は本書以外に、明治以後の詩歌に関する論考を相当多く書いている。「近代の抒情」「市民文庫」82、後に改名「河出文庫」42」と、「日本詩歌の象徴精神 現代篇」(本著作集8)は、その主なものであるが、その他にも散在する。それは本書巻末の「本書以外の関係論文」について見て頂きたい。これらを本書の論稿に加えて編成し直せば、やや体系のある著書をなすかも知れない。しかし本著作集は、未だ単行の自著として発刊したことのない論稿を集めることを目的としたので、このようなものになつたのである。

本書の原稿は、大正七年から昭和三十六年にわたり、実に様々の動機で執筆したものであるから、まとまりのない代りに変化には富んでおり、著者としては生涯の縮図を見るがごとく、万感の迫って

来るものがある。しかし、このようなことを読者に話しかけるのは、適切なことではないであろう。

最後に一言ことわっておきたいのは、本書第一部の終りの方に「二人の詩人的思想家」という題で掲げた、二人の哲学者の評論のことである。むろん、これも依頼による原稿であるが、自分としては自著の中に入れておきたい希望があるので、本書に収めたのである。この二人は哲学者とはいっても、学術的業績よりは評論・隨筆の筆者として名声が高く、また、それが豊かな詩想を湛えているために、多くの若い読者を魅していると思われる。その作品は、しばしば散文をもって書いた詩精神の表現であるといっても、さほど過言ではないであろう。これを本書に収めたことは、私の恣意によるとのみはいえないと信ずる。今一つは「木下杢太郎の象徴的戯曲」で、これはみずからこの題目を選んで執筆したものであるが、これも戯曲であるから、別に戯曲論を集めた一卷が本著作集にあるならば、当然その中に収めるべきものであった。しかし、杢太郎こそは本質的に詩人であり、その戯曲も劇詩と呼ぶにふさわしいものである。それで、これも散文をもって書いた詩精神の表現として、本書の他の諸稿の中に伍して、所を得ないものとはいえないと信ずる。

本書は実に雑稿の集積であるが、私の詩歌を愛する心は、ともかく全巻を貫いているのである。

昭和三十七年六月

岡崎義恵

近代日本の詩歌

目次

序

第一部 長詩の世界

日本近代詩の展開	三
近代詩人誕生の契機	一五
落合直文	三
晩翠の詩風	四三
藤村と有明	五四

木下杢太郎の象徴的戯曲……………七二

三木露風……………九〇

一 露風論……………九〇

二 「三木露風詩集」解説……………一〇三

三 「珊瑚集」の影響……………一一二

四 「緑の森」の解釈……………一二五

——愛誦する夏の文芸——

五 「良心」について……………一三〇

六 「日本象徴詩集」批評……………一四〇

大正初期の詩歌……………一四四

一 序言……………一四四

二 詩壇の輪郭……………一四七

三 象徴主義の詩……………一六五

四	人道主義の詩	一七五
五	民衆主義の詩	一八六
六	歌壇と俳壇	一九四
	二人の詩人的思想家	二〇五
一	高山樗牛	二〇五
二	阿部次郎	二三三
	詩壇の俳諧的精神	二四三

第二部 短歌の世界

	抒情の系譜	二五一
	短歌における幻想	二六四

——特に晶子の作について——

鷗外の短歌における色彩感覚	二八二
アララギ派短歌の本質	二九六
齋藤茂吉	三二一
一 茂吉の業績	三二一
二 近代詩人としての茂吉	三二三
三 茂吉の芸術観	三三八
白秋の短歌	三七〇
太田水穂	三九〇
一 「冬菜」について	三九〇
二 水穂の様式	三九三

会津八一の「寒燈集」……………三九六

「笹群」の印象……………四〇一

第三部 俳句の世界

俳句の本質と近代の抒情……………四〇七

俳句と日本文化……………四一九

俳句評価の基準……………四二六

日本詩歌としての俳句の地位……………四三八

俳句の詩的性格……………四四五

現代俳句の抒情性……………四五二

俳句と浪漫主義……………四六九

俳句の世界的意義	四八一
俳句の新しい課題	四八六
山廬の世界	四九六
「冬椿」の印象	五〇二
「朱卓」の劇的性格	五〇七
本書収載論文	五一五
本書以外の関係論文	五一九

第一部 長詩の世界

日本近代詩の展開

一

(明治の文芸は西洋の影響によって近代的行路を歩みはじめたが、詩歌の世界でもそれは著しい現象を示した。明治十五年(一八八二年)に出版された「新体詩抄」がその出発点をなしたと考えられる。「新体詩抄」は井上哲次郎・矢田部良吉・外山正一の三学者によって編まれたもので、その大部分は英・米の詩の翻譯であった。短歌や俳句のような小さな詩形に盛り切れない思想は、それまで漢詩によって表現するほかなかったが、「新体詩抄」によって新しい長詩形の模範が示されたので、これにならう者がつづいてあらわれた。竹内節編「新体詩歌」、山田武太郎編「新体詞選」、外山正一・中村秋香・上田万年・阪正臣作「新体詩歌集」などに、それを見ることができらる。

この間に個人的に長篇の詩作を示したものとして、湯浅半月の「十二の石塚」や、落合直文の「孝

女白菊の歌」などが注目されるが、いずれも叙事詩風のものであった。「新体詩抄」のあとをついで、

西洋の抒情詩を移入する役割をつとめたのは、明治二十二年（一八八九年）に出た「於母影」であった。

これは森鷗外・小金井喜美子・市村瓊次郎・井上通泰・落合直文等の新声社同人によって試みられた訳詩集であって、この中にはドイツや中国の詩の訳も加わり、その芸術的価値からいっても、「新体詩抄」のような稚拙なものではなく、今日よんでも十分鑑賞に堪え得るものになっている。

その後、相当芸術的価値の高い詩がだんだんあらわれるようになり、中西梅花・北村透谷などの作には感傷の調子もあるが、真率な抒情の声をきくことができる。山田美妙等の韻文論もあらわれ、詩論の進歩にも見るべきものがあつた。大体、このころまでを新体詩の発生期または創始期と考えてよいであらう。

二

明治二十八年（一八九五年）に日清戦役が終り、浪漫主義・主情主義がおこるとともに、詩壇は活潑となり、ほとんど文壇の中心をなすかと思われる情勢を示した。二十八年一月に雑誌「帝國文学」が生れ、これに拠る塩井雨江・武島羽衣・土井晚翠等は、古典主義的または理想主義的作風を以てあらわれた。高山樗牛は評論を以てこれを助け、上田敏（柳村）はフランス近代詩の紹介を以て、新しい詩風の一步前進すべきことを教えた。この中から出た晚翠は、三十二年（一八九九年）に詩集「天地有

情」を出すに及んで、詩壇の明星となった。

一方、明治二十六年（一八九三年）に発刊された「文学界」の同人は、透谷の死後、島崎藤村の詩を育てた。三十年（一八九七年）に出した「若菜集」によって、藤村は晩翠よりも一歩先立って、詩壇の第一人者となった。この時期は藤村・晩翠の対立時代と考えられるが、藤村は純日本風の優雅な感情に、新時代の生命を与えたもの、晩翠は中国風の剛健な思想を、西欧風の理想に近づかせたものである。ともに英・米文芸の教養にもとづくものであるが、晩翠にはユゴーやシラーのような仏・独詩人の影響がある。藤村はこの頃はまだフランスの詩は読んでいなかったと思われるが、元来フランス風の味を持った人で、後にフランス近代詩が移入されるまで、その地ならしをして置いた人であるといってもよいであろう。

藤村・晩翠によって新体詩は単なる西洋の詩の翻譯や模倣から脱し、また古風な擬古体を離れることができた。

「帝国文学」「文学界」の系統をほかにしては、明治三十年（一八九七年）に民友社から刊行された「抒情詩」が注目される。これは国木田独歩・松岡国男・田山花袋・太田玉茗・矢崎嵯峨の屋・宮崎湖処子の六詩人の作を集めたもので、若々しい純粹な浪漫的感情が素朴に表現されており、技巧の豊かな藤村・晩翠の境地とはまた違った清楚な趣がある。

これとほぼ時を同じくして与謝野鉄幹があらわれ、剛健な男性的気風を帯びた浪漫主義をうちたて

た。鉄幹がその妻晶子とともに開いた新詩社は、直文の浅香社のあとをうけて、詩歌の世界の中心となり、機関誌「明星」はこの後ながく新詩人を養うところとなった。

この時期は新体詩の成熟期であり、西洋風の浪漫主義的抒情詩が日本に確立した時代であるが、一面には日本の古典を復活させ、古語を造語のごとく駆使し、また叙事詩的なものを創り出そうとする意欲も相当強烈であった。

三

藤村・晚翠の名が詩壇に喧伝されるようになった頃、その後をつぐべき二人の詩人があらわれた。明治三十二年（一八九九年）に「暮笛集」を出した薄田泣菫がその一人で、三十五年（一九〇二年）に「草わかば」を出した蒲原有明が他の一人である。泣菫は藤村風の優婉な抒情とともに、古典的世界への憧憬を示し、「二十五絃」では古代に題材を求めた長篇の叙事詩をも試みた。有明も古代の世界や異国の伝説に興味を持ち、物語詩風の作を試み、また泣菫と同じく盛んに古語の復活を志したが、その特色は讚美歌やロッセティの詩などから影響を受けた、西洋風の冥想的な詩篇であった。殊にソネットを日本の音律で奏でようとする試みなどは、非常な成功を収めた。二人とも最初は浪漫的な詩風であったが、最後には象徴詩の影響を受けるようになった。

この時期は藤村・晚翠によってうちたてられた浪漫的な詩風が成熟の極に達した時なので、その傾